

## 「世の中に役立つ」とはどういうことなのだろうか

好井裕明

人文社会科学研究科教授

### 「世の中に役立つ」?

法人化以降の研究評価について、好きに書け。こういきなり依頼され、はたと考え込んでしまう。法人化以前だって、研究はそれなりに評価されていたはずだ。改めて評価について考えろという要請は、いったいどこから来るのだろうか。やはり「世の中のまなざし」を気にしてしまうからだろう。もちろん「まなざし」を気にするなどは、まったく思わない。むしろ「まなざし」を一切気にすることなく、自分の学問、研究テーマの意味を思い込み、わかる人にだけわかればそれでいい、などと孤高をきめこんでいた学者がいるとすれば、少なくとも私自身の専攻である社会学、さらには社会科学においては、正直もうそれだけではだめだよ、と言いたくなる。

社会科学、社会学。それが少なくとも、人々が暮らしている世の中を研究対象としている学問であるかぎり、やはり「世の中

に役立つ」という言葉は、つねに頭の中のどこかで響いている。ただ問題なのは、誰が住んでいる、誰のための世の中であるのか、ということであり、そうした世の中に、なにをどのように示していけば役立つことになるのだろうか、ということだ。

こう書いてくれば、国家、自治体などの支配的な立場に立ち、その意向を遵守する調査研究があり、他方被支配側にたち、さまざまに虐げられ抵抗をしている人々の場に降り立ち、そこから社会を批判し告発していく調査研究がある、という二分されたイメージが浮かんでくるかもしれない。

しかし現実はこのような硬直したものではないだろう。支配的立場にたつようには見えながら、そこにはらまれている矛盾を突き、修正を迫る研究もあるだろう。人々の場にたつようにみえながら、正義のよろいを身につけ自らは安全を確保しながら、支配的文化へわかりきった抵抗メッセージや

批判の言葉を繰り返すだけの研究もあるはずだ。私は、このような硬直したイメージからはいったん解き放たれたうえで、せっかくだから今一度、自らの調査研究、学問研究が「世の中」にはたす意味、どのようになれば「役立つのか」を考えてみる必要があると思う。

わたしたちの常識を批判すること

たとえば、今私は何人かの共同研究者とともに薬害HIV問題をめぐり血友病治療医師の聞き取り調査を行っている。この問題は、96年の訴訟和解以降も安部医師の裁判停止などマスコミをにぎわせている。

ただ当時マスコミがあらゆる機会、言葉をとおして作りあげた問題の構図があり、それは国家-製薬会社-医師の癒着の構造であり、医師=悪というものだ。当時マスコミが作りあげた構図がよほど強固かつ執拗なものであったのか、そのためもあり医師の聞き取りはなかなかスムーズには運んでいないのだが、私はこの調査をとおして明らかにしたいことがある。それは医師=悪という単純かつ決めつけの構図を壊したいということだ。確かに明快な構図があれば、問題の責任の所在も明らかになるし、それを遠くから理解しようとする多くの人々にとってもわかりやすいものだろう。

しかし、当時の現実はどうであったのか、

当時の治療のあたりまえとどのようなものであったのか、多くの医師は血友病治療の進展をめざし何をしようとして、どのような形でHIVに出会っていくのか、など、決めつけの構図では決して見えてこない問題群がある。そして今後薬害という問題が起こらないように考えていくうえで、医師-患者-家族という関係をどう作り直していくのかは重要な問題であり、今回の調査はその手がかりを提供できると考えている。

通常の医師-患者関係を理解する常識、医師を批判するために持ち出される知識からすれば、医師=悪という図式を壊そうとする調査研究は、そぐわないものかもしれない。しかし、その常識や図式が私たちの日常生活をより限定し、より平板なものにしているとすれば、それをゆっくりとではあれ変えていく研究は、やはり「役立つ」のではないだろうか。

私たちが普段ほとんど意識することなく使用している常識、それにしっかりと囚われていることさえ気づかないでいる常識。これを人々が腑に落ちるようなかたちで批判し、新たなかたちの常識の可能性をできれば示していくこと。私は、これが「役立つ」社会学の調査研究を評価していく基本ではないかと考えている。

## 研究成果を開いていく努力

ところで研究を評価していくとすれば、ぜひ考えてほしいことがある。それは研究成果を誰に向かって、どのように書いているのかということについて、より柔軟であるべきという点だ。専門学会誌に論文を載せることは確かに必要なことだろう。それを否定するつもりはまったくない。ただ学会員や限られた数の研究者サークルで流通する言葉や理屈の世界の中だけで自らの調査研究を完結させてはならない。少なくとも私はそう思う。専門論文を執筆すること。これは、いわば研究者としての必要条件だ。しかし十分ではないだろう。専門論文を執筆する一方で、その知見、私たちの常識を揺るがし、つくりかえていくのに役立つような成果を、より多くの人々に理解してもらえるような試みをすべきである。

昔勤めていた私学で、新聞のコラムに書いたものなどをすべて論文としてカウントし業績にしていた教授がいたというわさを聞いたことがある。当時私はあきれて目が点になってしまったのだが、もしそのコラムが読者の常識をくつがえし、世の中を批判していくインパクトが十二分にあるものであれば、仕事として大切な意味があるのではないかと、今は思ったりする。まあ、それほど極端ではないにしても、自らの調査研究の成果、これだけは知ってほしいと

考えることは、機会があれば、できるかぎり、より多くの人々に向かって、より分かりやすい言葉、分かりやすい形で発信する必要がある。たとえば、これまでの調査研究成果をもとに一冊の新書をまとめようとする。そのとき、ただ単に専門論文を割り振って新書の章構成などはできないはずだ。難解で不必要な概念は整理するし、論文では引用することだけが意味を持っていた部分は削除されたりするだろう。なによりもいいのは、自分がこれで理解可能だと思いついでいた表現や言葉がいかに多くの人々に分かりにくいものであるのか、を思い知らされることだ。

自らの調査研究の成果をいかに多くの人々に向けて解き放っていくのか。これが研究評価のいま一つの基本だと。私は、そう考えている。

(よしい ひろあき/社会学)